

表紙の写真：巣立ったばかりの雛に餌を与えるエナガ

滋賀工場は、約30年前、地域の自然を最大限活かして建設されました。
そのため、森や湿地など地域の本来の自然環境が保全されています。
敷地内の森や、保安林を通じてつながる地域の森では
エナガをはじめ、たくさんの動植物たちが命の営みを繰り返しています。
この豊かな自然環境を守り育て、生物多様性保全に貢献する活動を継続しています。

三菱自動車 パワートレイン製作所
滋賀工場 いきものずかん

発行日
2014年3月31日

発行
三菱自動車工業株式会社 パワートレイン製作所 滋賀工作部
CSR推進本部 環境技術部



作成 / 生きもの調査 / 写真 / デザイン
株式会社ラーゴ



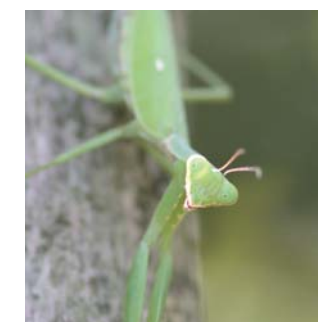
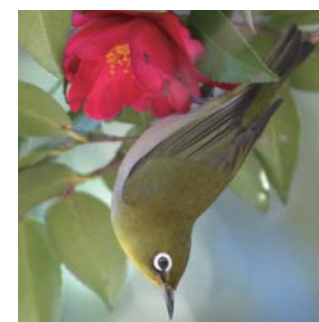
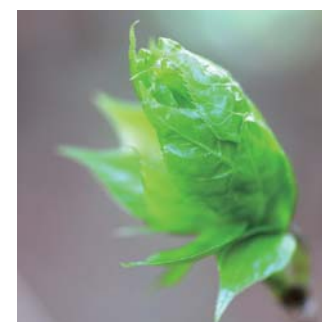
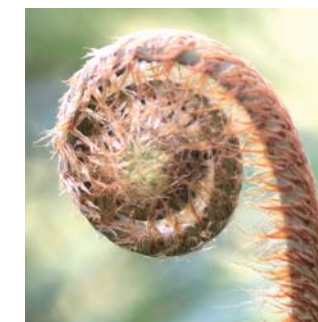
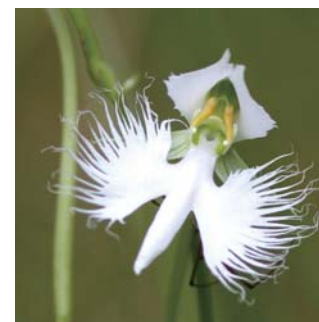
三菱自動車の環境への取り組みはWEBに掲載しています。
<http://www.mitsubishi-motors.com/jp/social/environment/index.html>



三菱自動車 パワートレイン製作所 滋賀工場 いきものずかん

— 生物多様性保全の取り組み —

Mitsubishi Motors
Wild Life of
Shiga Factory



Contents



- 生物多様性保全の取り組みについて 1
- 三菱自動車の生物多様性保全の取り組み 2
- 滋賀工場で始まった生きもの調査 2
- 滋賀工場 いきものずかん
 - サギソウの湿地 3
 - カナヘビのはらっぱ 4
 - コバミツの森 5
 - カモシカの森 7
 - カスミサンショウウオの池・茶釜川 8
- 滋賀工場 × 生物多様性 9

■ 生物多様性保全の取り組みについて

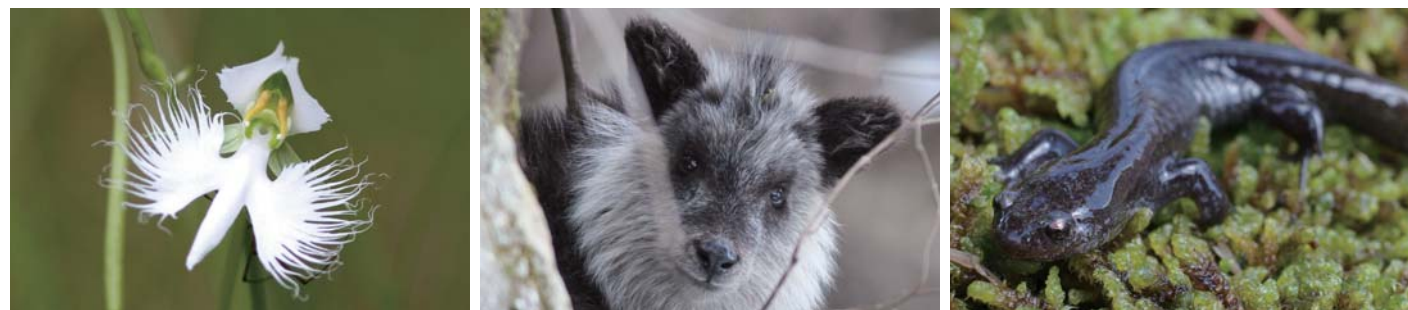
生物多様性って、なんだろう？

「生物多様性」という言葉を耳にしたことありますか？ 生きものがたくさんいること？ 珍しい生きものがいること？ 実は、そうではないのです。

地球には、長い時間をかけて、まわりの環境や生きものたちに適応しながら 3,000 万種もの生命が生まれました。これらの生命一つひとつに個性があり、直接または間接的に関わり合って暮らしています。そのため、**生物多様性とは、「地域の生きものたちの豊かな個性と、そのつながり」**であると言われています。

なぜ、必要なの？

生物多様性は、生きものたちの暮らしだけでなく、私たち人間の暮らしの基盤でもあります。衣食住の原材料や、歴史や文化の礎、気候の安定や治山治水など、私たちに安全・安心な生活環境を提供してくれています。たくさんの恩恵を与えてくれている生物多様性は、**地球が豊かで生命溢れる地球でありつづけるために必要であり、私たち人間が存続するためにもなくてはならないのです。**そして、生物多様性を守ることは、私たち自身の暮らしを守ることに繋がるのです。



■ 三菱自動車の生物多様性保全の取り組み

自動車は、人や物を運ぶ手段として私たちの豊かな生活に欠かせませんが、一方で、開発から廃棄に至るライフサイクルすべての段階で、地球環境に対して負荷を与えています。この負荷をできるだけ少なくし、生きものが息できる豊かな地球環境を残すことが、私たち三菱自動車果たすべき重要な社会的責任の一つと考えています。

当社では、2010年8月に策定した「三菱自動車グループ生物多様性保全基本方針」に基づき、これまで地球温暖化防止、環境汚染防止など生物多様性への影響の低減につながる取り組みを推進しています。そして、事業所所在地域における取り組みの一環として、2013年度に滋賀工場および周辺の生きもの調査を実施しました。その結果、様々な生きものが見つかりましたので、この度「いきものずかん」を作成することにしました。



■ 滋賀工場で始まった生きもの調査

2013年から一年間、工場緑地とその周辺で生きもの調査を実施したところ、379種の植物と、325種の動物が見つかりました。そのうち国内や近畿地方、滋賀県などで絶滅のおそれがある希少な生きものが、なんと42種も含まれていました(敷地内では20種)。良好な湿地に生えるサギソウ、健全な水辺と森が必要なカスミサンショウウオ、そして、大きな森に暮らす国の特別天然記念物カモシカまでいたのです！

生物多様性保全基本方針

人間の活動が生物多様性の恩恵を受けているとともに、生物多様性に影響を及ぼしているとの認識を持ち、当社のグループ企業全体で、地球温暖化防止、環境汚染防止、リサイクル・省資源の取り組みに加え、生物多様性に配慮した活動に取り組み、生物多様性への影響の把握と低減に継続的に努めます。

1. 事業活動での配慮
省エネルギー、廃棄物の発生抑制、化学物質排出抑制などを推進するとともに、工場建設などの土地利用においては周辺地域に配慮し、生物多様性への影響の把握と低減に努めます。
2. 製品での配慮
燃費改善、排出ガス対策、リサイクル設計を推進し、環境に配慮した材料の採用に努めます。
3. 理解・啓発・自覚の継続
当社の活動と生物多様性の関係についての理解と自覚を、経営層から従業員まで全員で共有します。
4. 社会との協働・連携
サプライチェーンおよび株主、自治体、地域社会、NPO/NGOなどのステークホルダーと連携し、活動を推進します。
5. 情報の発信・公表
当社の活動内容や成果について、お客様や地域社会への情報発信・公表に努めます。

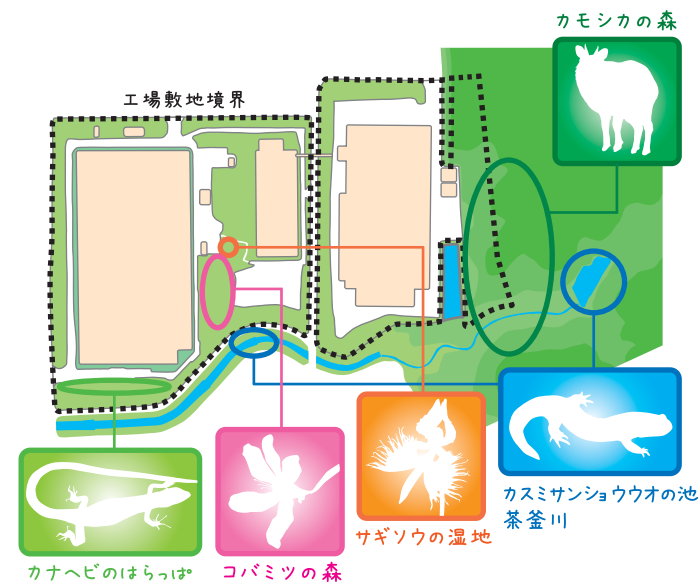


滋賀工場は、約30年前、地域の自然を最大限活かして建設されました。そのため、森や湿地など地域の本来の自然環境が保全されています。



動植物の専門家に調査を依頼するかわら、滋賀工場や本社環境担当者たちも実際に森や湿地に入り、生きものたちを探しました。

いきものずかん 注目ポイント



いきものずかん 凡例

- 【見やすい季節】 (マークの無いものは一年中見られます)
- 早春：2～3月
 - 初夏：6月
 - 秋：10～11月
 - 春：4～5月
 - 夏：7～9月
 - 冬：12～1月
- 【希少性】
- 文：文化財保護法（特別天然記念物、天然記念物）
 - 環：環境省第4次レッドリスト2012（EX：絶滅、EW：野生絶滅、CR：絶滅危惧ⅠA類、EN：絶滅危惧ⅠB類、VU：絶滅危惧Ⅱ類、NT：準絶滅危惧）
 - 近：近畿レッドデータブック2001植物（絶滅：絶滅種、A：絶滅危惧種 A、B：絶滅危惧種 B、C：絶滅危惧種 C、準絶滅危惧種）
近畿レッドデータブック2002鳥類（危機：危機的絶滅危惧種、絶危：絶滅危惧種、準絶：準絶滅危惧種、要注：要注目種）
 - 滋：滋賀県レッドデータブック2010（絶滅：絶滅種、絶危：絶滅危惧種、危増：絶滅危機増大種、希少：希少種、要注：要注目種、分布：分布上重要種、他：その他重要種）

サギソウの湿地

夏にはばたく小さな白鷺たち

湿地の植物は、どれも小さくて繊細です。中でも、特に人々の心を惹きつけるのは、滋賀工場の緑地のシンボル、サギソウでしょう。その複雑な形をした真っ白な花は、白鷺が翼を広げた姿に見立てて名付けられました。7月から8月に、日当りの良い所に点々と咲くのが見られます。日本を代表する野生のランで、山野草としても大人気ですが、開発などにより生育環境が失われてきたことで、今では野生のものはとても少なくなりました。この繊細な植物たちが生き続けるには、湿地という環境そのものを守っていくことが大切なのです。



サギソウ



トウカイヨモウセンゴケ

受け身のハンターにご用心

ピンク色の可愛い花を咲かせるのに、なんと葉っぱで虫を食べる食虫植物なのです！トゲトゲの葉っぱの先に見える水玉は、朝露ではなくネバネバの甘い蜜。これに誘われて虫がくっついてくるのを、毎日じっと待っているのです。



トウカイヨモウセンゴケの葉

貴重！葉っぱの食事風景

写真中央に虫がいるのが見えますか！？トウカイヨモウセンゴケの葉に吸い寄せられた虫たちは、もう逃げられませんが、もがたびに粘液が巻き付き、動けなくなるのです。葉は2日間程かけて、ゆっくりと虫の養分を吸い取ります。



スイラン

秋の湿地を彩る花

湿地に生えるキクの仲間、細長い葉っぱがランの仲間に見えるからつけられた名前が「スイラン」。10月～11月頃に黄色い花を咲かせ、サギソウの花が終わった後の秋の湿地を彩ります。



ヒメヨスガグサ

そよ風が似合う素朴な花

お米よりも小さいこの粒々が、実は花。5月から6月にかけて、湿地でささやかに咲いています。弱々しくていかにも繊細な植物ですが、さらさらと風に揺られる姿は涼しげでとっても優雅なものです。



ケシンジュウガサ

見える？直径2mmの真珠

湿地の中でひとときわ明るい緑の、ふさふさした葉っぱたち。地味で目立たないけれど、夏から秋には「真珠」の名前をもらった美しい果実が実ります。華やかなサギソウばかり注目されますが、その横でこんな宝石が光輝いています。



ミズクサの仲間

幸せの黄色い耳かき

夏、湿地を這いつくばるようにして探すと…地面から耳かきのような形をした、黄色い花が顔を出します。その大きさ、わずか4mm！かわいさ姿とは裏腹に、ミジンコなどのプランクトンを捕まえる食虫植物なんです。



湿原のじゅうたん

一面緑色のじゅうたんを

一面緑色のじゅうたんを広がったように湿地を覆うコケの仲間です。まるでクッションのようにもこもこしています。その中には貴重な湿地の植物と一緒に暮らしているの、そっと覗くだけにしてくださいね！



ノアザミとキチヨウ

夏限定、湿地のカフェ

夏、ノアザミの紫色の花とキチヨウの黄色が湿地を彩ります。アザミの花は昆虫がとまった時にだけ花粉を出し、昆虫の体に花粉をひっつけます。小さな花にも大切な花粉を無駄にしない工夫が備わっているんですね。



ニホンカナヘビ

のんびり日向ぼっこが大好き

日本固有種で、「日本にしかない、かわいいヘビ」からニホンカナヘビと名づけられたそうです。トカゲの仲間、自分で体温を調節することができず、日向ぼっこをして体を温める姿をよく見かけます。だから、草地のように明るくて開けた場所が好きですが、木登りも得意。コンクリートの壁もらくらく乗り越えられるので、住宅地などでも生きることができます。庭で見るトカゲといえば、そのほとんどはニホンカナヘビでしょう。



ホオジロ

白いほっぺのホオジロ

少し草丈が高い草場が好きで、ちょっと地味な小鳥です。白いほっぺがトレードマークですが、シジュウカラの方がよっぽど白いような気も…。公園や河原など、身近な場所にたくさんいます。春、木のてっぺんで大きな声でさえずる姿がとっても目立ちます。



シヨウリョウバッタモドキ

かくれんぼの達人

みんな知ってるあのバッタ…じゃない!? よく見かけるシヨウリョウバッタよりもジャンプ力は弱く、人の姿を見るとすぐに葉の裏に隠れてしまいます。チガヤの葉に紛れると、その姿を見つけるのはとっても難しく、まさにかくれんぼの達人です。



スズメ

誰もが知ってる人気者

みんな知ってる、あのスズメですが、田んぼや畑の減少とともに、近ごろ姿を見る機会が減ってきているようです。滋賀工場では、草地で餌を探す姿がちらほら。セマダラコガネをくわえて、巣へと飛び去っていきました。



カワラヒワ

翼の黄色がチャームポイント

スズメにも似ていますが、翼の一部が黄色くて、コロコロコロっと、かわいい声で鳴く小鳥です。草のタネが大好きで、群れで草地にやって来て、みんな夢中で草のタネをついばむ姿が見られます。



セマダラコガネ

東洋のヒゲ男爵

触覚が立派で良く目立つコガネムシ。人の手でアメリカに運ばれてしまい、農地で大発生することもあるらしい。海外では「オリエンタルビートル」と呼ばれています。なんだか凄そう！



ペニシジミ

朱色のしじみ貝

公園や畑のような日当たりの良い草地でよく飛んでいる小さなチョウ。1997年発行の30円普通切手のデザインにも選ばれており、国民的シジミチョウのひとつ。シジミはしじみ貝に似ていることから名づけられたそうです。



チガヤ

ふわっふわの純白のタネ

6月半ばにタネが熟し、草地が真っ白な綿毛に包まれます。若い穂は食用に、葉や茎は屋根材に、根は薬にと、昔から日本人との関わりが深い植物です。



スミレ

足元で輝くアメジスト

なにげない道端で咲き、私たちに春の訪れを教えてくれるスミレ。春の日の光を浴びた紫色の花は、まるで光り輝くアメジストの様です。日常の会話に出てくる植物名が、そのまま図鑑にも載っている数少ない植物の一つです。



日本のライオン

みんな知ってるタンポポ

その英名は、ダンテライオン (dandelion)。ギザギザした葉がライオンの牙を連想させることに由来します。外来種のセイヨウタンポポが目立つ中、もともと日本にいる植物として、健気に頑張る花を咲かせています。

カナヘビのはらっぱ

コバミツの森



コバノミツバツツジ

コバノミツバツツジ、略してコバミツ

3月から4月にかけて、滋賀県の里山を代表するアカマツ林やコナラ林を、華やかなピンク色で彩るツツジ科の低木。葉っぱの芽吹きよりも先に花をつけるので、いっそうピンク色が際立ちます。林内でも良く目立つこの花は、アブやハチ、チョウたちにとって、花の少ない春先の大事な餌でもあり、たくさんの昆虫たちが花の蜜を吸いに訪れます。



吸蜜に訪れたビロードツリアブ

動物と植物、支え合いの関係

昆虫たちに餌となる蜜を提供する代わりに、コバノミツバツツジは花粉を運んでもらいます。長い長い年月をかけて作り上げられた、お互いにもちつもたれつの関係が、今も命の営みを継続させているのです。工場の緑地内にも、進化の歴史や生きものたちのドラマが日々映し出されていると思うと、なんだか緑地が輝いてみえてきませんか!?



タヌキ

センサーカメラで夜間に撮影

夜の森が繁華街

昼間、土穴や藪でのんびり過ごしているタヌキたち。夜が食事と社交の時間です。意中のお相手は？ 美味しい食べものは？ ひっそりとしているように見える夜の森。実は、とても賑わっているんです！



コゲラ

日本最小のキツツキ

耳を澄ませば森の奥から聞こえてくる、コツコツコツ…という小さな音。きっとコゲラが餌を探して木をつついていっているのでしょう。自慢のくちばしで穴をあけて巣まで作っちゃいます！



シジュウカラ

森のビジネスマン？

白いシャツに黒のネクタイで今日も森に出勤。春にはペアで子育てに忙しいけれど、冬にはコゲラやエナガたちと一緒に群れをつくってみんなで行動することも。ツツピー、と鳴く声も特徴的。



ヒヨドリ

いつも賑やかピーヨ ピヨ

ちょっと騒がしい、ちょっと気が強い、そんなヒヨドリは果実が大好き。野生の植物は、動物に果実を食べてもらってその中にあるタネを運んでもらいます。ヒヨドリは植物にとって大事なパートナーでもあるのです。



エナガ

いつも仲良し

いつも10羽くらいの群れをつくってみんな仲良く飛びまわります。賑やかにおしゃべりしながら、枝先の小さな虫をせっせと食べて回ります。じっと待っていると、向こうから寄って来てくれることも。



エナガの巣立ち雛

春 初夏

巣立っても親におねだり

春は小鳥たちも子育てに大忙し。エナガも巣立ったばかりの我が子に、せっせと餌を与えます。子どもたちは、親に向かって翼を震わせながら一生懸命に鳴いて、おねだりします。人の子と同じですね！



ヒヨドリ

人知を超えた飛行体

大きな体に小さな翅（はね）を持つハチ。大きな体やブーンという大きな羽音に似合わず、とても穏やかな性格です。こちらからイタズラをしない限り、刺されることはほとんどありませんのでご安心を。



アオハナムグリ

初夏 夏 秋

昆虫たちの食堂？

花粉を食べる昆虫たちは、ごちそうを求めて、食堂でばったり出会うこともあるようです。ご飯を取り合って争うことなく、仲良く並んで食べています。何かおしゃべりしてののでしょうかね。



オオカマキリの孵化（ふか）

暖かい春の日差しを受けたコバノミツバツツジの花々に見守られ、去年の秋に産みつけられた卵からいっせいにオオカマキリの子どもたちが出てきました。数百匹の子どもたちも、生き残ることができるのはごくわずか。昆虫界では無敵の王者オオカマキリも、厳しい自然を生き抜いたものだけに与えられる称号なのかもしれません。

カモシカの森



カモシカ

文 特別天然記念物
滋 危増



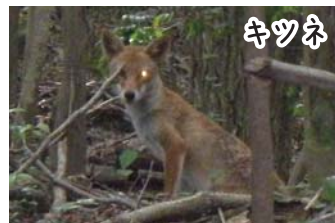
親子!?



溜め糞

「命」をつなぐ森とその物語

コバノミツバツツジの花が終わる頃、多くの草花が目覚め、芽を吹きます。ウシの仲間で、新芽や葉っぱが好物のカモシカにとっても春が訪れます。そう、出産育児の季節を迎えるのです。滋賀工場の裏の保安林から続く森の中でも、カモシカが子どもを連れて歩いている様子が確認されました！草花がグングン伸びる季節は、食べ物も豊富で安心して子育てができるのでしょう。その姿を見ることはなかなかありませんが、林床に山盛りになった溜め糞がその存在を教えてくださいます。その寿命は15年とも言われ、長年森に住み続けるカモシカがいるということは、この森が豊かであることを示しています。ここには、「命」をつなぐ森とそこに暮らすカモシカをはじめとしたたくさんの生きものたちの物語があります。



キツネ

狩場あつての私です。

水稻の守り神とされるのは、ネズミ採りの名手だから!?でも狩りは楽しなさそう。生きていくためには、広い狩場が必要です。この森はなかなか良いところ? 毎晩のように餌を求めて森を歩きまわっています。



キビタキ

見てよし、聴いてよし

森の木々が芽吹く4月下旬、遠く東南アジアから渡ってきて、子育てをする小鳥です。黒地に黄色のアクセントが映える姿同様、さえずりの声も美しく、初夏の森をにぎやかに彩ってくれます。



ニホシアカガエル

カエルなのに寒いのも平気

カエルの産卵といえば、春、田んぼに水が入る季節ですが、まだ雪が降る2月頃、浅い水辺で産卵します。他の生きものが休んでいるからこそ、天敵も少なく、他のカエルよりも早く成長できるのです。



コシアキトンボ

腰の模様がポイント

羽化してすぐの飛び力が弱い間は森の中で過ごし、成熟すると産卵場所であるため池に移動します。生きていくためには、森と水辺を必要とし、それらを安全に行き来できるつながりが必要です。



ショウジョウバカマ

酔っ払いの袴 (はかま)

春に咲かせる紫色の花は酔った顔、下に広がった葉っぱは袴に見立ててつけられた名前。湿ったところで多くみられるけれど、実は高山帯の厳しい環境でも生きることができるんです。



フキノトウ

雪の下のごちそう

早春の風物詩であり、山菜としてもおなじみのフキノトウ。正式な名前はフキ。土や雪から頭を出したばかりのつぼみが最も食べ頃です。山の中で見つめるのはなかなか難しい!?



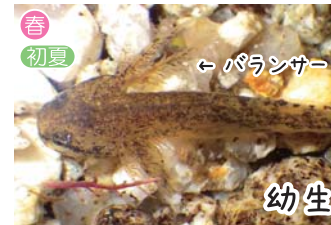
カスミサンショウウオ

森と水のネットワークのシンボル

早春の2月下旬から3月に、ため池や浅い水辺に集まり、産卵します。この繁殖期以外には、森の中で過ごしています。朽木の下や、ネズミの掘った穴の中など湿った場所でクモやミミズなど地表を動く小さな動物を食べて過ごしています。森と水とつながっているからこそ、その姿を見ることができるのです。



卵のう



幼生

卵は「卵のう」と呼ばれる袋に入っています。メス一体が2個の卵のうを産みます。卵のうには約25~60の卵が入っており、1カ月ほどで孵化します。袋から出てすぐの幼生には、バランサーと呼ばれる器官があります。これが無いと水底で水平に体を保てないのですが、餌を食べて泳ぐ力がつくと自然に脱落します。6月から7月にかけて、エラ呼吸から肺呼吸になり、陸上生活が始まります。2年ほど経つと、立派に成長し、水辺に戻ってきて繁殖します。

カスミサンショウウオの池 茶釜川



カワセミ

翡翠(ひすい、かわせみ)

コバルトブルーに輝く宝石のような翼をもつ、野鳥界の永遠のアイドル。翡翠と書いて、「ひすい」とも「かわせみ」とも読みます。このため池では、オスがメスに餌の小魚を渡してプロポーズしている姿が見られました!近くで子育てするようです。



キセキレイ

尾羽ふりふり、トコトコ歩く

尾羽を上下に振ったり、早足でトコトコ歩いたり、とっても愛嬌のある小鳥です。水辺が大好きで、小さな虫を探して、忙しそうに動き回ります。チチン、チチンと、金属を叩いたような声で鳴きながら飛びのくのも特徴です。



ニホシイシガミ

あの昔話の主人公

ウサギとカメの昔話で有名なカメのモデルです。「どうしてそんなに遅いのか〜」と言われていますが、実際はものすごく敏感で、のんびり日向ぼっこをしていても人や天敵の気配を察知すると、一瞬で水の中に飛び込みます。



ミナミメダカ

今も残るメダカの学校

童謡メダカの学校でも歌われたように、昔は群れをなして泳ぐ姿が日本全国で普通に見られました。しかし、現在では各地で減少し、希少種とされる地域も多いようです。茶釜川では、今でも群れで元気に泳いでいます。



ゲンジボタル

命がけのプロポーズ

ホタルの光は、古くは「日本書紀」で詠まれており、夏の風物詩となっています。光ることは求愛行動とされ、自分の身をさげた命がけのプロポーズです。この水辺では、6月中旬に少数ですがその光が見られました。



ヒメゲンゴロウ

風船みたいなお尻の泡

ゲンゴロウの仲間は、翅(はね)とお腹の間に空気をためることができます。水中でも息をすることが出来ます。写真に写っている風船のような泡は、息継ぎ用の大切な空気が入っているんです!



ナミハシロウ

獐猛な道案内人

人が歩くたびに少し前を飛びながら、まるで道案内をしているかのように進む甲虫の仲間です。キバが非常に大きく、他の虫を食べる獐猛な一面があります。それにも、アップで見ると凄い迫力ある顔ですね!



ショウジョウトシボ

昆虫界一の酔っ払い

真っ赤な顔をしているトンボ。その赤色が、お酒好きな伝説上の動物「猩猩(しょうじょう)」のようであることから名づけられました。縄張り意識が強くて、オス同士はよく喧嘩をしています。

滋賀工場 × 生物多様性

多様な環境がはぐくむ豊かな生態系

生物多様性とは、「ある地域で暮らす生きものたちの豊かな個性とつながりのこと」であり、単に生きものがたくさんいれば良い、というものではありません。その土地にもともといた在来の生きものたちが、互いに影響を与え合いながらバランスよく、共存している状態が良いのです。

滋賀工場やその周辺には、森や湿地、はらっぱ、池や川といった水辺など、多様な環境があります。そこにはそれぞれの環境に適応した植物が生育しています。そして、その植物の葉を食べるアオムシや花の蜜を吸うチョウ、木の実を食べる小鳥などの小動物が住み、その小動物を食べる肉食動物であるタカやキツネが暮らしています。こういった生きものたちの「食べる - 食べられる」の関係が複雑につながっているということは、滋賀工場の緑地や周りの環境の生態系が、豊かで健全であること、ひいては生物多様性が高いということを私たちに教えてくれています。



滋賀工場の生態系のイメージ

今後の取り組みについて

私たち三菱自動車は、自治体や地域社会、団体などとも連携しながら、これらの生きものの保全活動を進めていきます。そして、事業所とその周辺の自然環境とのかかわりを「知る」「体験する」ことを通じて、当社の事業活動と生物多様性とのかかわりについての理解を深め、外来生物への対処も含め、全社で生物多様性保全活動を進めていきます。

外来生物の脅威

豊かな生態系が残されている一方で、もともと日本にはいなかったとされる外来生物と呼ばれる生きものも見つかりました。アライグマやウシガエル、アメリカザリガニ、ニセアカシアなどは、外来生物法により、特定外来生物や要注意外来生物に指定されています。これらは、外来生物の中でも、放っておくと本来の生きものたちの関係を壊し、生態系のバランスを崩してしまう恐れが大きい生きものたちです。



アライグマ

カワイイけれど外来種
北アメリカ原産で、動物園から逃げ出したり、ペットだったものが捨てられて野生化したとされています。手先が器用で、いろいろなものを食べるため、生態系への悪影響や、農作物への被害が大きいです。カスミサンショウウオの卵も食べてしまいます。



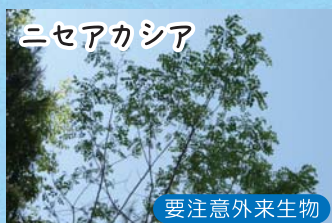
ウシガエル

外国から来た大食漢
北アメリカ原産で、食用として日本に導入された大型のカエル。池の中で、フォーフォーという牛のような声で鳴くため、この名が付けられました。肉食性が強く、ヤゴやエビ、小魚などをたくさん食べるため、生態系への悪影響が大きいとされています。



アメリカザリガニ

懐かしいけど、実は…
北アメリカ原産で、ウシガエルの養殖用の餌として輸入されたエビの仲間。昔からザリガニ釣りとして子どもたちにも親しまれていますが、水生動物や水草をたくさん食べるため、全国的に生態系への悪影響が懸念されています。



ニセアカシア

不死身の再生能力
北アメリカ原産のマメ科の高木樹種で、砂防のための緑化や街路樹として全国的に植えられました。現在では分布を拡大し、在来種を脅かしています。その強さの秘密は、切り倒されても、脇芽を變幻自在に繰り出す能力にあり、すぐに再生してしまいます。



ハイタカ 冬 環 NT 注 滋 希少

冬、滋賀工場の周りの森に飛来するタカの仲間です。工場の鉄塔や木にとまって、小鳥などを狙って狩りをしています。滋賀工場の生物多様性の高さをあらわす、シンボルのひとつと言ってもよい生きものです。環境省では絶滅危惧種に、滋賀県では希少種に選定されています。